

卒業式に見る袴の現代的着装の研究Ⅲ

— 伝統的な視点から —

A study of wearing modern hakama at graduation ceremony Ⅲ
—From traditional viewpoint—

田中淑江 長谷川紗織 大塚絵美子 宮武恵子

Yoshie TANAKA, Saori HASEGAWA, Emiko OTSUKA, Keiko MIYATAKE

1、はじめに

女子大生の卒業式の袴姿は、明治期の女学生の通学及び式服での袴着用を源流とする。

その後、女学校での制服制定や洋服の着装により袴着用は一時衰退するが、1980年代前半より再び復活し、現代では卒業式の装いとして定着している¹⁾。

本研究は先行研究「卒業式に見る袴の現代的着装の研究Ⅰ、Ⅱ」の継続研究である。近年女子大生に着用される卒業式の袴姿に関して、時代と共に変化している装いの特徴を多面的に取り上げ、その要因について伝統的和服の視点から考察することを試みている。拙稿Ⅰでは袴下に着用される長着の種類の変化と、長着選択の一般的定義の変化についての関連性を明らかにした²⁾。またⅡでは学生の卒業式に対する意識と、そこで選択する袴の装いに対する意識のずれを明らかにし、現代の日本人と和服の関係を表わすものとして指摘をした³⁾。

本稿では近年の学生の袴姿に影響を与える着付けについて着目した。卒業式当日、多くの学生が袴の着付けを袴レンタル業者や美容院に依頼し、一部の学生が親族や自身で行っているのが実情である。その着装を詳細に見ると長着の

衿元や衣紋、半幅帯の見え具合、袴丈などが着用者により着付けが一定でない様子が見て取れた。この状況は何によるものなのか、まずは袴着付けの定義の変遷を分析しそれを基に、現代の卒業式における袴の着付けの多様性について考察することを目的とする。

2、研究方法

2016年3月15日に行われた共立女子大学の卒業式当日、被服学科学生76人を対象に、卒業式当日の装いの撮影を行った。撮影箇所は先行研究⁴⁾と同様に1 全身写真、2 全身背面、3 全身右側面、4 上半身、5 衿元、6 足元、7 頭部、8 鞆、9 ネイルの9か所である。なお、一次資料として用いる袴姿を撮影した写真は、従来と同様に被服意匠研究室との共通資料とする。

また卒業年度の被服学科所属の学生に卒業式当日の装いの調達方法や、着付け、卒業式に対する意識についてアンケートを行った。



図 1 左から紐の反面が別布の袴、全面に模様が入った袴、襷に柄のある袴、地紋のある袴

3、卒業式における袴姿の実態

3-1 平成 27 年度の傾向

撮影した写真資料から、袴を着用していた学生 73 人を対象に平成 27 年度の装いの傾向分析を行う。まず、袴下の長着を見てもと、長着は小振袖 47%、振袖 26%、小紋 17%となった。袴は無地に刺繍入りが 42%、無地が 31%、ほかしが 14%であった。また袴自体は無地であるが、紐の反面が別布の袴や、全面に模様が入った袴など、今までではあまり見られなかった種類の袴も散見された(図 1)。半袴は無地が 56%、刺繍入りが 34%、模様入りが 6%となった。無地の中でも白色が目立ち、色つきの半袴は 1 人であった。伊達袴は 88%に着用が見られ、種類を見てもと、無地は 59%、柄入

りが 17%、2 色は 16%であった。帯ではアクセントになる色の無地の帯が 42%、アクセントとなる地色に柄の帯が 34%、長着または袴と同系色の無地の帯が 12%となり、大半の学生がアクセントとなる色の半幅帯を使用していた。履物ではブーツ着用が 52%、草履着用が 48%となりブーツ着用者が草履着用者を上回った。足袋では、全体の 48%に着用がみられ、その内 97% 白足袋を着用しており、1 人のみレースの足袋を着用していた。鞆では、巾着が 42%、和装用ハンドバックが 25%、洋装用バックが 18%となった。その他装飾品では 95%に着用は見られなかった。装飾品の着用例は、主に袴の後紐の結び目に造花やつまみ細工などを付けている場合が多いが、通常袴には使用しない帯締めを前紐の上に締めている学生もみら



図2 装飾品の例
左：帯締め 中央：つまみ細工 右：造花

れた(図2)。

3-2 平成26年度の装いととの比較

平成26年度と平成27年度の袴の装いの様子を比較する。長着では着用の傾向に変化はなかったが、振袖と小紋の割合が減少し、小振袖と訪問着・附下の着用割合が増加している(図3)。袴は無地及びぼかしのみの袴よりも、それぞれ刺繍入りの袴の着用に増加がみられた(図4)。衿元の装いでは、半衿の無地着用割合が増加している(図5)。昨年度は無地と刺繍が同数程度であったが、今年度は白色無地半衿の割合が刺繍半衿の割合に対して倍近くになっている。伊達衿も同様に傾向に変化はないが、無地の着用が他の種類に比べて3倍以上の割合を占めている(図6)。帯では、柄の帯の使用が多くみられていたが、今年度は無地のものの割合がかなり増加している(図7)。しかしアクセントとなる色を用いることは、長着または袴と同系色を用いることより高い割合を占めるといった点においては、平成27年度と同様の結果であった。履物は昨年度よりブーツ着用割合が増加したが、学生の履物は草履またはブーツ二種類である傾向に変化はなかった(図8)。足袋は昨年度同様ほとんどの学生が白足袋を着用しており、変化は見られなかった(図9)。鞆は巾着の使用が多く、昨年度の和装用バックと巾着の割合と逆転していることがわかった(図10)。帯飾りなども装飾品の割合にも変化はなく、少数に使用が見られるだけにとどまった(図11)。

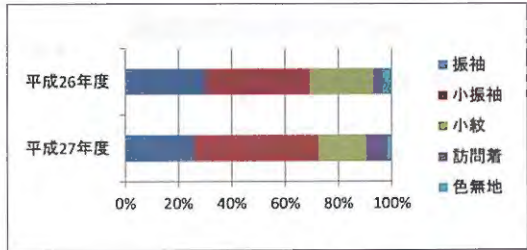


図3 長着の種類

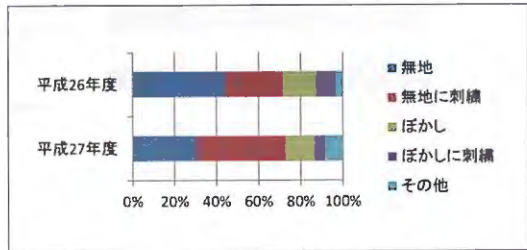


図4 袴の種類

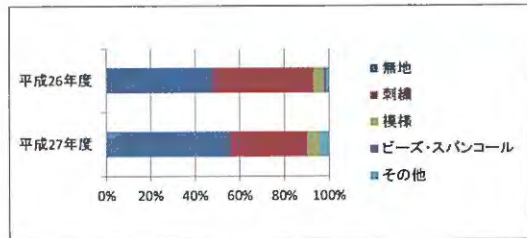


図5 半衿の種類

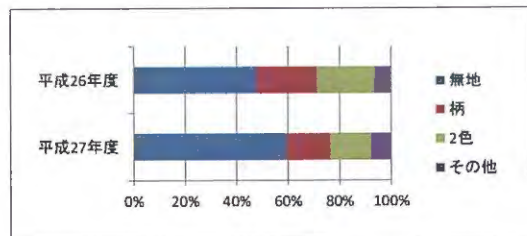


図6 伊達衿の種類

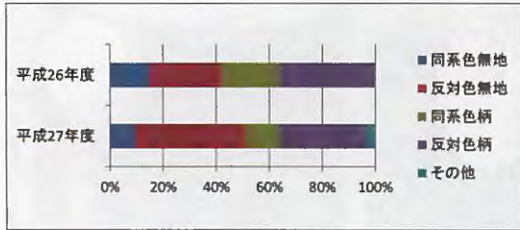


図 7 帯の種類

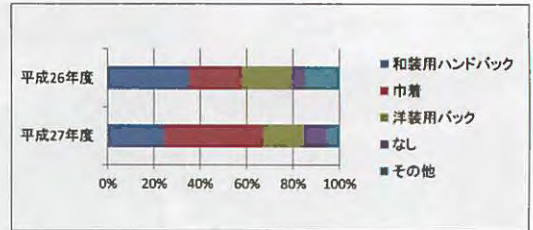


図 10 靴の種類

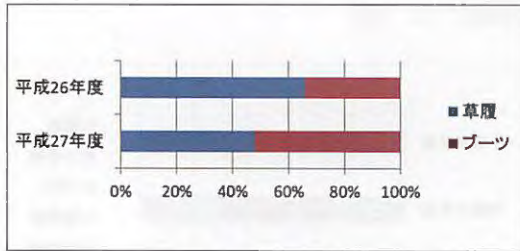


図 8 履物の種類

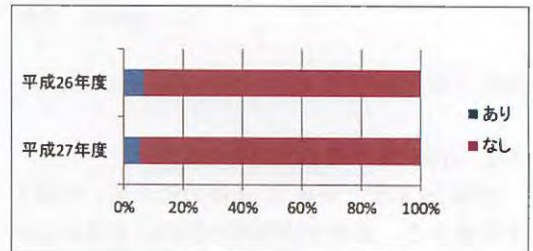


図 11 装飾品の有無

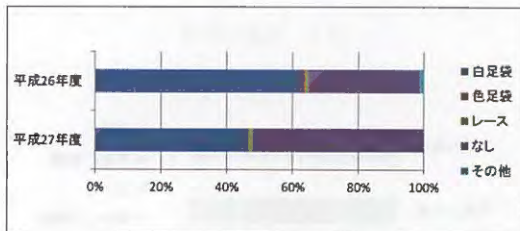


図 9 足袋の種類

この結果から、全体の袴着用傾向からはあまり大きな変化は見られないが、前年度よりも装飾性の高い小物の使用割合が少ない傾向がみられた。

4 着付け方法の変化と実態について

4-1 袴の着付けに関する記述の変遷

ここでは、袴の着付けについて、時代を経て変化が生じているのかどうか 1980 年から現代における着付けの変遷の検討を行う。資料は袴の着付けに関する書籍や雑誌を用いる。検討の際の時代区分は、筆者が先行研究で明らかにした卒業式に見る袴姿の変遷を参考にする。まず時代を 1980 年代初期から 1980 年代後半を袴姿復活の黎明期、1980 年代末期から 1990 年代中

期を定着期、1990 年代後期から現代を安定期のように区分した⁵⁾。この区分を用いて書籍や雑誌に見る袴の着付けの変遷を述べる。

まず袴の着用が復活した黎明期の参考資料⁶⁾⁻¹¹⁾の傾向は、衣紋は抜かず、衿元をきっちり合わせ、半衿は 1.5cm ほど出す。また前紐から 1cm 程度半幅帯を出し、袴の裾はくるぶし程度で後が下がらないようにといった記載が多く見られる。袴姿の定着期では、衣紋は抜きすぎ指 3 本程度、衿合わせはやや深めに、半衿は 1.5 ~ 2cm 程度出し、半幅帯は 1cm 位のぞくよう位置にあわせ、袴丈は足の甲よりやや上になるようにといった説明がなされている¹²⁾⁻¹⁵⁾。袴姿の安定期には、衣紋はあまり抜かず、衿合わせを深めに合わせ、半衿は 1 ~ 2cm 程度出し、半幅帯は 1 ~ 2cm 見せる。袴丈はくるぶしぐらいにといった内容が示される傾向がわかった¹⁶⁾⁻³⁰⁾。

黎明期と定着期の間で、衣紋や衿合わせが少し緩く着つけるように変化しているが、定着期と安定期では変化はほとんど見られなかった。よって約 30 年間を通して変化を見てみると、着付け方法に大きな変化は見られないが、半衿



図12 書籍による袴丈（くるぶし程度）の違い
左：2010年出版決定版きもの着付けより転載
右：2015年出版着付けの技より転載

や帯など少し多く見せるような加飾傾向や、衣紋を少し抜くなど多少の変化の傾向が明らかとなった。

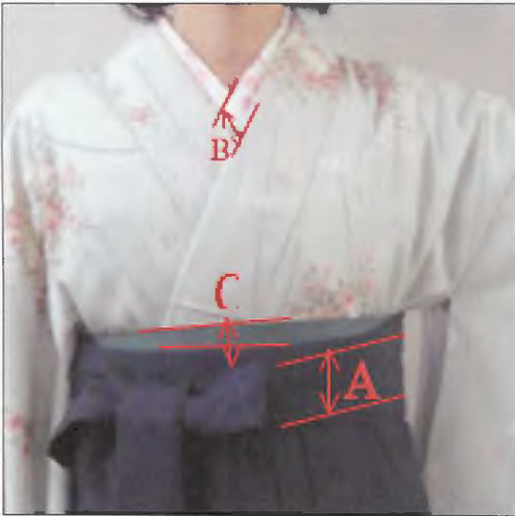
更に各期間の着付けの様子を、参考資料の口絵などから比較をしてみても、大きな違いは見られない。しかし2010年出版の『決定版きもの着付けと帯結び』と2015年出版の『着付けの技』では、両方の袴丈の記載がくるぶし程度と同様の表記にも関わらず、着姿を写真で比較してみると、一方は足首が見えているのに対し、もう一方では足の甲が見える程度である(図12)。このように同様の記載ではあるが、着付ける人により解釈が異なる場合もあることが分かり、着付けの解釈が一様ではないことを認識した。



図13 袴着姿の基準、寸法の基準

4-2 学生の袴の着姿に見る着付けの実態

続いて、学生の袴の着姿の現状を検討するために、本学学生の卒業式当日に撮影をした袴姿の写真を用いて分析を行う。前項で述べたように、約30年の間は袴の着付け方法に大きな変化が見られないため、黎明期以降に出版された袴の着付けについて記載のある書籍を用いて、装いの基準を定める。基準を定める部分は、多くの書籍に共通の記載があり袴の着姿のポイントとなる、衣紋、衿合わせ、衿中心部分の半衿、正面から見える半衿の分量、帯の見える分量、前後の袴丈の7箇所である(図13)。それぞれの箇所の基準の決め方ではあるが、袴の着付けに関する書籍や雑誌の記述を比較して決定



半衿幅 5.5 (標準後紐幅) : A (写真紐幅計測値) = X : B (写真半衿幅計測値)
 帯幅 5.5 (標準後紐幅) : A (写真紐幅計測値) = X : C (写真帯幅計測値)

図 14 数値算出式と計測箇所

した。

まず、衣紋については、「衣紋は抜かず」³¹⁾「衣紋の抜きはやや控えめに指 3 本くらいにします」³²⁾とある。衣紋の記載が見られた書籍すべてに、衣紋についてこのような記載がみられる。そのため衣紋の抜き方は、首から衿まで指が 3 本程度入る距離とする。衿合わせでは、「衿合わせはやや深めに合わせます。」³³⁾「衿は深く合わせます」³⁴⁾など一般的な衿合わせである鎖骨のくぼみを隠す程度よりも深くあわせることを基準とする。背面から見る衿中心での半衿では、「半衿が見えないように」³⁵⁾「うしろでは半衿を 5mm 控える」³⁶⁾といった記載がみられるため、後衿中心では半衿が長着の衿から見えないことを基準とする。一方正面からみた半衿の見える分量では、1cm³⁷⁾、1.5cm³⁸⁾、2cm³⁹⁾の記載がみられ、また 1cm ~ 2cm など数値に幅を持たせている記載も複数確認できる⁴⁰⁾。そのため一番記載の多かった、1cm ~ 2cm の範囲を基準とする。帯の見える分量では、「前帯の 1cm

表 1 袴着装の基準

項目	基準
衣紋	首から衿まで指が 3 本程度入る距離であること
衿合わせ	鎖骨のくぼみを隠す程度よりも深くあわせること
衿中心部分の半衿	後衿中心では半衿が長着の衿から見えないこと
正面から見える半衿の分量	長着の衿から 1cm ~ 2cm 見えること
帯の見える分量	袴紐から見える分量が 1 ~ 2cm であること
後袴丈	前裾よりも上がり気味であること
前袴丈	くるぶし程度の位置に裾が位置すること ブーツの場合は、足首は見えないがくるぶしよりも上に位置すること

下に紐を合わせる」⁴¹⁾「見えても 1 ~ 2cm 程度」⁴²⁾などの記載が多くみられたため、袴紐から見える分量が 1 ~ 2cm を基準範囲とする。後袴丈は「後ろの裾が下がらないように」⁴³⁾「横から見た時、後裾が少し上がり気味に」⁴⁴⁾と記載がなされているため、前裾よりも上がり気味であることを基準とする。一方で、前袴丈は「くるぶしくらい」⁴⁵⁾「足の甲くらい」⁴⁶⁾「足首が見えるくらい」⁴⁷⁾というように記載が異なっており一様ではない。しかし袴丈(紐下)は、一般に長着の着丈の 7/10cm の寸法で仕立てられる。これは、だいたいくるぶし程度の長さにあたる寸法である。この寸法には袴の黎明期よりも前の 1930 年から現代にいたるまで変化は見られない⁴⁸⁾。また着付けの際には、帯を締める前に袴を体に当て、袴の裾の位置を決定し紐の位置に合わせて帯を締める。このような手順を踏み着付けを行うということは、帯や紐の高さよりも、裾の位置が重要であると考えられる。そして実際の人体では、くるぶしから足の甲までの高さには差はあまりないため、足の甲に触れておらず、足首が見えない範囲である、くるぶし程度の高さを基準とする。この袴丈の基準は草履の際の基準であり、ブーツ着用の場合は、



図15 左：基準（指3本程度）の衣紋 中央：通常の衣紋 右：振袖着用時と同様の衣紋



図16 左：基準（深い衿合わせ）の衿合わせ 右：通常の衿合わせ



図17 左：基準（控えられている）の衿中心半衿 右：控えられていない半衿

「草履の時より短く決める」と記されている⁴⁹⁾。よって足首は見えながくるぶしよりも上に位置することを基準とする。また本調査での判断は目視による判定を行うが、基準が明確な数値で表されている半衿と帯の分量については写真資料の目視だけでは判断が難しいため、同一写真内の正面後紐幅と衿合わせ部分の半衿の幅をはかり、比の計算を用いて数値化を行う（図14）。また同様に帯の見える分量も同様に数値を求めた。

以上の基準を用い、学生の袴の着付け傾向の分析を行う（表1）。まず長着に注目し、衣紋の抜き方を見てみると、基準である指3本程度の衣紋は26%であり、最も多く見られた状態は、通常の長着の着付けと同様のこぶしが入る程に抜かれた衣紋で55%の学生に見られた。

その中でも振袖を袴下の長着として着用している学生の中には、通常の衣紋よりも大きく振袖着用時の衣紋と同様に抜かれていた（図15）。次に衣紋の抜け方が関係していると考えられる衿合わせでは、深く合わせられていた学生は12%と1割程度であった。通常の長着の衿合わせである、鎖骨のくぼみが隠れる程度の着付けであった学生は67%と約7割を示した（図16）。また背面から見る衿中心部分では、本来なら長着の衿から半衿が控えられていることが基本であるが、半衿が控えられていた学生は半数以下の43%であり、長着の衿から半衿が見えている学生は53%であった（図17）。一方、正面から見える半衿の分量では、基準である1～2cmの範囲内の学生は46%であった。基準よりも多く出ている学生は35%、出ていないま



図 18 左：基準（1～2cm）の半衿 中央：基準以下の半衿 右：基準以上の半衿



図 19 左：基準（1～2cm）の帯 右：基準以上の帯



図 20 左：基準（上がり気味）の後袴丈 右：前袴丈と平行の後袴丈

たは 1cm 以下の学生は 19%であった（図 18）。続いて袴に注目すると、帯が紐から見えている学生は 95%であり、その中で見えている分量



図 21 左：基準（くるぶしくらい）の前袴丈 右：足の甲にかかっている前袴丈

が 1～2cm の学生は 38%、2cm 以上見えている学生は 47%を示した（図 19）。また後袴丈は前裾よりも上がっている学生は 28%で、前裾と同じ高さの学生は 49%であった（図 20）。前袴丈は足の甲にかかっている学生が 55%であり、足の甲が見える学生が 38%のため、半数

以上の学生は基準から外れていることになる(図 21)。

以上の結果より、どの項目も書籍の記載を比較して決めた基準に合致する物はなく、通常の長着の着付けに見られる傾向を示したのものや、半衿及び帯のように基準よりも幅広く着付けがされている様子が明らかとなった。

4-4 着付けの場所による傾向

卒業生に実施したアンケートによると、卒業式当日の着付けは袴をレンタルした際にセットとして含まれるレンタル業者による着付け、美容室による着付け、親族による着付けが行われている。この3グループを比較してみると、レンタル業者による着付けは、基準を満たしている割合が多い項目が、後半衿、半衿の見える分量、半幅帯の見える分量の3項目であり、美容室による着付けでは、衣紋の加減、半幅帯の見える分量の2項目、親族による着付けでは、半衿の見える分量のみであった。前後の袴丈、及び衿合わせでは、どのグループも基準を満たしている学生の割合は少ない。すべてのグループに共通してみられる傾向は、前後の袴丈ではどちらも基準よりも長めに着付けられている場合が多く、衿合わせは一般的な着付けと同様の衿合わせであった。

グループ内の着付けでは、レンタル業者は基準に対するずれはあるものの、全体的には統一された袴の着装が見られる。しかし美容室や親族により着付けでは基準からずれただけでなく、袴の着姿の印象が個々に異なり、着付けの技量に差がみられた(図 22)。

4-5 考察

以上の結果を踏まえると、書籍における着付けの方法に変化が見られないのは、卒業式の袴が式典すなわち儀式に用いられる特別な衣裳という位置づけである点に一因があるのではないか。式典や儀式は伝統や継承を重んじ変化は少ないものである。そのため書籍に見る着付けに

は変化が生じなかったのではないか。しかし、拙稿では卒業式に着用する長着の選択に関しては変化を遂げている。この違いは長着を選ぶのは自分であり、自分の好みを長着の選択に容易に反映させることが出来る。一方、袴の着付けに関しては自分で着付ける技術や知識を持っている人が少なく、他人任せが多いので着方を変えるという発想にまで至らないのではないか。また卒業式における袴の着用は卒業式の一度きりである人も少なくはない。たとえ着用時に不便さを感じようとも、次の着用機会がなければ着付けを改善しようとは思わないであろう。そのため書籍の表記は変化なく現代に伝えられているのではなかと考える。

また着付けについて、着付ける場所の種類別に見てみると、レンタル業者による着付けに統一感が見られた理由としては、各業者とも当日着付け終了後、学生を式へ送り出す前に、統括者が袴着姿の確認を行うためではないかと推察できる。卒業式当日の着つけ現場では、一度に10人前後の利用者が手早く着付けられている。着付けが終了すると、統括者は学生の着姿の全体のバランスなどの確認及び手直しをしていた⁵⁰⁾。このような作業により、学生の袴着姿には統一感が生まれると考えられる。それに対して、美容室は各美容室内では袴着姿に統一感があるのかもしれないが、式には様々な店舗で着付けられた学生が、一堂に集まるため袴着姿がまちまちになると考えられる。また、着付けを行う側も多様な場所で着付けを学んでいるため、知識や技術が統一されておらず、袴着姿に違いが出ると推察する。親族による着付けでは、着付けを学んだ経験のある人が着付けをするとは限らない。現代では着付け方法に関する書籍や映像資料などが多く存在している。これらを使用して着付けを行うことも十分に考えられる。そのため他の2つのグループよりも大きく個々の袴着姿に差が生まれると考える。また親族による着付けがこのような状況である理由は、和服着用の機会の減少した現代においては、着付



図 22 着付け場所による着付けの違い

けの継承がほとんど行われなくなっていることに起因する。現在長着の着付けですら家庭内で継承されることが少なく、そのような状況の中で袴といった特殊なものの着付けの継承は、なおのこと行われていない。実際卒業式に袴姿が見られ始めたころの新聞には、「昔懐かしい袴の着つけ講習会」（1983年3月8日読売新聞）といった母親向けの着つけ講習会の様子が紹介されるように、袴の着つけはなじみの無いものであった。このような状況がレンタル業者や美容室での着付けを利用することにもつながっている。

卒業式という儀式的場において、適した袴着姿で出席するべきであるが、着付ける人物が異なるため学生の袴着姿に差異が生まれることは、仕方のないことであるともいえる。そのため基本となる着付けを大きく逸脱せず、全体的に統一感のある袴着姿に仕上げるのが着付けをする立場の者には求められる。また袴を着用する側にも、個性や個人の嗜好を優先させず、場をわきまえ適した装いを選択することが求められると言える。

5 まとめ

平成27年度における卒業式の装いの傾向では、装飾華美な様子は見られず半衿や帯の装いに無地が多く使用されるなど、例年よりも落ちついていた傾向を示した。しかし一方では、袴の種類に無地やぼかし、刺繍以外の装飾が施されたものが若干ではあるが増えた。

また書籍に見る袴の着付け方はこの30年で大きく変化した部分はないが、唯一変化した箇所として、装飾の機能を持つ半衿や帯などが少し幅を広く出し、加飾の傾向がみられた。

実際の着付けでは、どこで着付けを行うかによって袴着姿が異なり、全体に統一感のない着付けが見られることが分かった。現代において、袴の着用の機会は限られている。したがってその着付けも馴染みのないものとなっている。そ

のため着付けの基準があるとしても、基準の解釈は個人の判断に任ずものとなり、袴着姿が統一感のないものとなっていると考える。一生に一度の特別な機会として袴を選択し、卒業式に臨むのであれば、気品ある袴姿で参列することが望ましい。しかし着付け直後は凜とした袴姿であったとしても、卒業式後までに様々な活動を行うと着崩れは自然と生じてしまう。本調査はそのような状況の中で行われたものであったため、より一層袴の着付けに統一感や気品さを求めることはできなかったと考えられる。今後、卒業式の袴姿に凜とした気品ある装いを望むには、可能であれば袴の着付けを知り、自分で着くずれを整える術を覚えることではないだろうか。袴の着装の基準や着付けを知っていれば、着崩れたときに袴姿を整え、品ある袴姿を保つことが可能である。このように近年伝統的和装の継承が難しくなっている状況であるため、和装教育に携わる者は、卒業年度の学生に袴に関する講義や袴の着付けについて指導を行っていきたいと考える。

註

- 1) 筆者が新聞4紙（朝日新聞・読売新聞・毎日新聞・繊研新聞）を用いて分析した結果、袴復活の黎明期を1980年代初期～1980年代後期、定着期を1980年代末期～1990年代中期、安定期を1990年代後期～現代と時代区分を行った。田中淑江・長谷川紗織・宮武恵子、現代に見る女子大生の卒業式の袴姿－伝統的着装の変化について－，服飾文化学会誌，Vol.16,2016,p1-15
- 2) 田中淑江、長谷川紗織、大塚絵美子、宮武恵子、卒業式に見る袴の現代的着装の研究Ⅰ，共立女子大学紀要，2015，第61号，p11-47
- 3) 田中淑江、長谷川紗織、大塚絵美子、宮武恵子、卒業式に見る袴の現代的着装の研究Ⅱ－伝統的な視点から－，第62号，

- 2016,p75-87
- 4) 2)、3) に同様
- 5) 1) に同様
- 6) 美しいキモノ' 83 春号, 婦人画報社, 1983, p239-242,256-259
- 7) 塩月弥栄子・熊谷栄美子, 現代きもの冠婚葬祭, 講談社, 1985,p24-25
- 8) 婦人画報社・書籍編集部, 晴れ着の帯結び, 婦人画報社, 1986,p92-97
- 9) 和服-平面構成の基礎と実際-
- 10) 婦人画報社・書籍編集部, 謝恩会・パーティーの装い振袖のヘアと帯結び, 婦人画報社, 1988,p 5-11,30-39
- 11) 博愛教育研究所, きもの教本, 民族衣装文化普及協会, 1988,p42-45
- 12) 岡本信弘, 帯結びレッスン, グラフ社, 1990,p77-78
- 13) 装道きもの学院, 装道きもの学院テキスト高修皆修課程●実技編, 装道出版局, 1992,p48-55
- 14) 定本着つけと帯結び百科, 講談社, 1993, p11,p28-29,p240
- 15) 赤平清仙, 普及版手結び着つけ●きもの着方と帯結び, 1994, クレオ, p50-51
- 16) 市田ひろみ, 改訂新版京の着つけと帯結び, 講談社, 1998p14-15,p56-57
- 17) 振そで着つけと帯結び百科, 講談社, 1999,p19-21
- 18) 清水とき, おしゃれなきもの教室礼装きものルール, 世界文化社, 2000,p20-21
- 19) 着つけと帯結び, 講談社, 2001,p51-53
- 20) 煤孫勇夫, 増補新装版おしゃれに装う着つけと帯結びきもの着つけ, パッチワーク通信社, 2004,p9,p95-98
- 21) TPO 別きもの基本, 世界文化社, 2005, p54-55
- 22) 家庭画報特選いざというとき困らないきもの装い決定版, 世界文化社, 2006, p105,107,110-111,121-124
- 23) 主婦の友新基本 BOOKS 着物のきほん
- 着つけと帯結び, 主婦の友社, 2008,p84-87
- 24) 河本靖男, 新・道あかり基礎から花嫁着付まで着付ガイドブック, 2009,p89-91
- 25) きくちいま, 家族みんなで使えるよくわかるきもの着付けと帯結び, PHP 研究所, 2009,p145-149
- 26) 振袖大好き! 振袖の華やか帯結び 100 選, 世界文化社, 2009,p121
- 27) 帯スタイル-帯結びテクニック集 保存版-, ひろ着物学院, 2010,p110-113
- 28) 赤平清泉, 留袖から浴衣、小紋、振袖、七五三、男のきものまで決定版きもの着付けと帯結び, 世界文化社, 2010,p196-203
- 29) 山岡京子, きちんと着る着物の基本, 主婦の友社, 2010,p12
- 30) 荘司玲子, 着つけの技 [改訂版] かさね、あわせ、むすぶ, 学校法人国際文化学園・国際文化出版局, 2015,p99-104
- 31) 8) に同様
- 32) 12) に同様
- 33) 13) に同様
- 34) 28) に同様
- 35) 16) に同様
- 36) 17) に同様
- 37) 16) に同様
- 38) 6)、27) に同様
- 39) 15)、28) に同様
- 40) 12)、13)、17) に同様
- 41) 8)、10)、11)、12)、15)、24)、27) に同様
- 42) 13)、14)、18)、21)、30) に同様
- 43) 8) に同様
- 44) 10)、15)、27) に同様
- 45) 8)、11)、19)、21)、25)、29) に同様
- 46) 6)、13)、14)、18)、20)、24) に同様
- 47) 27) に同様
- 48) 吉村千鶴, 現代裁縫教授書, 東京裁縫研究会出版部, 1930,p173、最新和裁全書,

卒業式に見る袴の現代的着装の研究Ⅲ

主婦の友社,1956,p336、婦人生活編集部、和服裁縫独習書,同志社,1958,p232、山本らく,新訂和裁提要,刀江書院,1960,p261、和裁=基礎と仕立て方=,講談社,1961,p198、大妻コタカ,図解説明初歩より奥義まで和裁講座(後編),日本女子教育会,1963,p312、岩松マス,写真と図解の和服裁縫,婦人生活社,1969,p144、和裁=基礎と仕立て方=〈改訂新版〉,講談社,1969,p189、岩松マス,新しい寸法による図解式和服裁縫礼服編,雄鶏社,

1970,p68、東海学園女子短期大学出版部,1979,p227、興津佳平,労働省認定専門和裁技能教科書(二),全国和裁団体連合会,1981,p155、興津佳平,労働省認定専門和裁技能教科書(三),全国和裁団体連合会,1981,p76

- 49) 16)、19)、21)、25)、29) に同様
50) 平成 27 年 3 月 15 日にレンタル業者による卒業式当日の着付けの様子の見学を行った。